

現代ガリシア語における接語化

石岡 精三*

Cliticization in Modern Galician

Seizo ISHIOKA

Key Words: Government, Head Movement, Relativized Minimality

0. はじめに⁰⁾

本稿は, Campos (1989, 以下で C と略記) と Uriagereka (1988, U と略記) で取り扱われているガリシア語の Cliticization (以下で CL と略記) に関する基礎的な論考を構成する。¹⁾具体的には, これらの論文を再解釈する形で論が展開される。代名詞接語 (Clitic, cl と略記) は基底生成された項位置 (A 位置) からゼロ範疇 (X^0) へ付加移動すると前提される。つまり, CL は主要部移動 (Head Movement) の適用を受けることになる。第1節では, ガリシア語の CP 構造と CL に関する基本前提が設定される。第2節と3節では, それぞれ [-Finite] CP (不定法節) と [+Finite] CP 中での CL の事例が検討される。第4節においては, WH 要素が移動する事例での CL が検討される。第5節では, Left Dislocation と Focalization の CL への影響を考察する。第6節は, 否定要素 (Neg) が生じた場合の挙動が勘案され, 第7節は結語を構成する。

1. CP 構造に関する仮説

以下の (1) は, 本稿で前提される CP 構造と CL に関する基本前提 (仮説) である。

(1) 基本前提 (仮説 α)

原稿受付: 平成4年5月26日

*長岡技術科学大学語学センター

- (a) CP 構造
 $[_{CP}[_{FP}[_{NegP}[_{AgrP}[_{TP}[_{ModP}[_{AspP}[_{VP}]]]]]]]]]]]$ ²⁾
- (b) 移動によって痕跡となった X^0 範疇への CL は許容されない。³⁾
- (c) 語彙挿入された X^0 範疇への CL は許容されない。
- (d) 一般的に、P あるいは V によって統率される CP 中にある単一構造の C と F への CL も可能である。⁴⁾
- (e) X^0 範疇の (付加) 移動としての CL は、最上位にある Y^0 要素に対する上位付加によって発動する。また、ある一定条件下で下位付加が適用される。
- (f) CL は、V あるいは Aux. 要素の主要部移動が完了した時点で、基底生成された位置から一挙に発動する。
- (g) ゼロ範疇の移動と考えられる CL では、Head Movement Constraint (HMC) (より広範には Relativized Minimality) が発動しない。⁵⁾
- (h) Clitic Placement Constraint (CPC) は、単一構造の X^0 、あるいは最上位にある X^0 の付加構造への上位付加 CL に対してのみ適用される。⁶⁾

主語 NP は、その Thematic Subject Position (TSP) である SPEC (V) 位置に基底生成される。当該 SPEC (V) 位置にある主語 NP に主格は付与されないと前提される。Case Filter の要請から、当該位置にある主語 NP は主格が付与される可能性のある SPEC (Agr) 位置 (Syntactic Subject Position (SSP)) へ移動する。SSP 位置に移動した主語 NP は、V を始発項として循環的に T 位置まで主要部移動した T の複合体が更に Agr 位置へ移動した時点で当該 Agr に関する SPEC-HEAD Agreement の適用により主格を付与される。⁷⁾ また、本稿では、主語 NP がその SSP 位置へ移動した場合でも更に上位の SPEC 位置へ移動可能と考える。具体的には、一定条件の下で (UG の一般原理が許容する限り) SPEC (F) 位置へ移動可能と考える ([+Finite] CP)

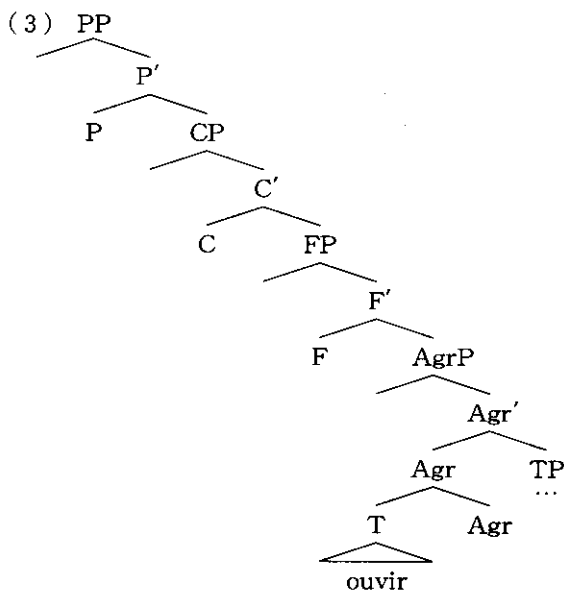
2. [-Finite] CP (不定法) 中での CL

ポルトガル語同様、ガリシア語には2種の [-Finite] CP (不定法節) が存

在する。それぞれ、屈折不定法 (Inflected Infinitive) と非屈折不定法 (Non-Inflected Infinitive) から構成される CP である。不定法 CP 中では上位左方付加が発動する⁹⁾と考える。最初に、非屈折不定法 CP の事例を検討する (cl には 2 重下線を付す)。

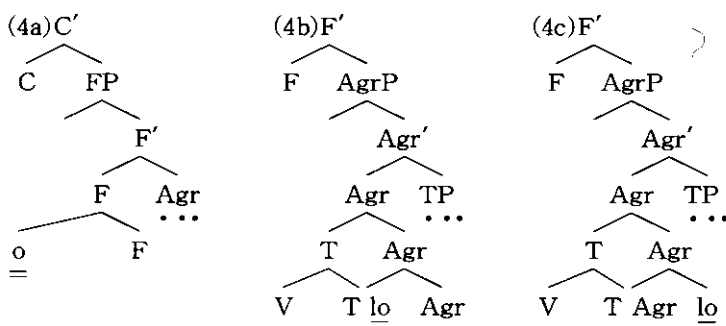
- (2) a. *pra ouvi-lo*,... 'to hear it,....' [U: 353]
 b. *pra o ouvir*,... [U: 353]

上例でも観察されるように、一般的に非屈折不定法の場合は後接 (Proclisis) と前接 (Enclisis) の双方が許容される。後述する屈折不定法の場合と異なり、(2) では V の主要部移動は Agr 位置で停止すると考えられる。よって、(2) の基本構造として (3) が想定される。



CP が P (*pra*) によって統率されるため、C, F への CL が可能である。更に Agr への CL も考えられる。この場合、C への CL は排除される。機能範疇である F はその sister である AgrP を L 標示しない (AgrP = Barrier)。⁹⁾一方、F への CL は許容される。前述のように、F はその sister

である AgrP を L 標示しない。語彙的要素である cl が付加移動し、AgrP の bar. 性が相殺されるためである (CL では Relativized Minimality が関与しない)。仮説 α の前提 (h) により、最上位にある Agr の複合体への CL (上位左方付加) が排除される。つまり、F への CL が発動し、(2b) が適切に派生する。(2a) の派生が問題となるであろう。仮説 α の (e) にあるように、付加構造を形成する Agr への下位付加を前提してみよう。これにより、(2a) が適切に派生されると思われる (この場合、仮説 α の (h) の規定により、CPC が発動しない)。結果として、(2) の最終的な構造として (4) が想定される。¹⁰⁾



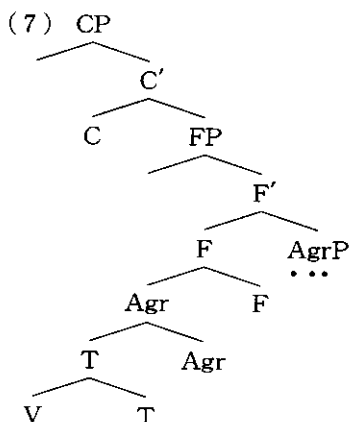
次に、非屈折不定法 CP が主語となる事例を検討する。(5a) は Agr の

- (5) a. ouvilo é necesario 'to hear it is necessary' [U: 353]
 b. *ouvir é necesario [U: 353]

付加構造に対する CL (下位付加) によって派生される。(5b) の派生が問題を惹起する。ここでは、Agr の付加構造に対する CL (上位左方付加) を排除する必要がある。ここでは、少なくとも [-Finite] (不定法) CP において、最上位にある X^0 の付加構造に対する上位左方付加が排除されると前提しておく (この場合、仮説 α の (h) の規制と重複することになる)。

次に、屈折不定法 CP 中での CL について考える。非屈折不定法の場合と異なり、Enclisis が許容されない (() 内はガリシア語形)。

- (6) a. pra ouviredes,... (para ooírdes,...) [U: 353]
 b. *pra ouviredelo,... (para oírdelo,...)¹¹⁾



屈折不定法では、V の主要部移動が Agr 位置にとどまることなしに更に F 位置まで移動すると考えられる。屈折不定法語尾の形で F が実現されている (cf. U: 354). (6) の基本構造として、(7) が想定される。CP が P (*pra*) に統率されるため、C あるいは F への CL が可能となる。C への CL により、(6a) が適切に派生される。CPC の適用に関する仮説 α の (h) により、F への上位左方付加は許容されない。また、最上位にない Agr への上位左方付加も許容されない (仮説 α (e))。 (6b) の非文性を説明するためには、F への下位付加を排除する必要がある。

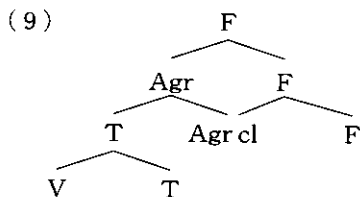
(5b) と (6b) が惹起する問題はどのように打開されるか。3つの打開策が考えられるであろう。それを仮説 β (a-a'') として以下に示す。

(8) 仮説 β ¹²⁾

- (a) (不定法) CP において、下位付加は Agr に限定され、且つ Agr への CL は下位付加に限定される。
- (a') (不定法) CP において、下位付加は Agr に限定され、且つ Agr への (上位) 付加は P あるいは V によって統率される CP 中の Agr に限定される。
- (a'') (不定法) CP において、下位付加は左方付加によって発動し、Agr への CL は下位付加に限定される。

仮説 β (a) により、F の付加構造に対する下位付加は許容されない。つまり、

(6b) が生成不可能となる。(5b) に関する問題もまた、解決される。この場合、F への(上位)付加は許容されない。同時に、Agr への上位左方付加も排除される。つまり、(5b) も生成不可能となる。仮説β(a'') は問題を惹起するようと思われる。つまり、(6b) において、F への下位左方付加を排除する要因が存在しないと思われる。ここで、(6) 中の F は形態論的に実現されている点に留意されたい。仮に、(6) 中の F に対して下位左方付加を適用したとすると(9)の構造が派生する。



ここで、屈折不定法の終端 X^0 連鎖を検討する。(V+T+Agr+cl+F) が当該連鎖を構成する。仮に、適切な終端 X^0 連鎖として (cl+V+T+Agr+F) と (V+T+Agr+F+cl) のみが妥当すると前提可能であるとすると、F への下位付加が許容されないことになる。¹³⁾一方、非屈折不定法では、(V+T) で当該不定法形態が生成されると考えられるため、この種の問題が起こらない。仮説β(a'') でも、(2) と (5-6) が適切に説明可能である。更に吟味する必要があるが、本稿では仮説β(a') が採用される。

次に、屈折不定法が主語 NP を伴う事例を検討する(()内はガリシア語形)。

- (10) a. pra o vo-los dous ouviredes,... [U: 354]
 (para o vδ-los dous oírdes,...)
 b. *pra vo-los dous o ouviredes
 (*para vδ-los dous o oírdes,...)
 c. pra vo-los dous o ouvrir,... (非屈折不定法)
 (para vδ-los dous o oír,...)

この場合、(a) cl+主語 NP+不定法が許容され、(b) 主語 NP+cl+不定法が排除される。CL は(6)と同様に説明される。つまり、当該 CL は C への上

位付加によって発動している。また、主語 NP (*vo-los dous* (you-the two)) は SPEC (F) 位置にあると考えられる。つまり、(10a) が適切に派生される。(10b) を派生させるためには、主語 NP が SPEC (C) 位置へ移動する必要がある。しかしながら、SPEC (C) 位置に生起する要素が WH 要素などの演算子 (Operator) であると前提すると、当該 SPEC (C) 位置への主語 NP の移動は許容されない。つまり、(10b) が非文と予測される。¹⁴⁾

後述するように、[+Finite] CP 中では上位右方付加が前提される。不定法 CP においても、上位右方付加によって CL を説明することが可能である。同時に、Agr への下位付加を想定する必要があるが、この場合には、CPC の適用が重要となる。(2) を考える。(2b) は F への上位右方付加により生成される (CPC により、Agr への上位右方付加は排除される)。(2a) は、Agr への下位付加で説明される。前述のように、(5) 中の C と F への (上位) 付加が許容されない。これにより、(5b) の非文性が説明可能となる。(5a) では、C と F への上位付加が許容されないため、Agr への上位右方付加が発動可能となる (この場合、CPC に抵触しない点に留意されたい)。(6) も同様に説明可能である。当該 CP が P (*pra*) に統率されるため、C と F への CL が可能となる。Agr が最上位の付加構造を形成していないため、当該 Agr への付加移動 (CL) は排除される (仮説 α (e))。結果として、C と F への上位 (右方) 付加が考えられるが、後者の F への上位付加は CPC によって排除される。つまり、(6a-b) の文法性判断が適切に予測されることになる。(10a-b) も同様に説明可能である。ここで、以下の (11) のどちらが適切であるかが問題となる。

(11) ガリシア語における上位付加

- (a) [+Finite] CP と [-Finite] (不定法) CP において、上位右方付加が発動する。
- (b) [+Finite] CP では上位右方付加が、[-Finite] (不定法) CP では上位左方付加が発動する。

言語内的、そして記述的・理論的観点からは、(11a) がより妥当すると考えられる。本稿では、以下の Campos (1989: 35) の言が妥当すると考える。¹⁵⁾つまり、CL に関して、ロマンス諸語はガリシア語と類似する段階にある言語 (European Portuguese) とガリシア語の段階を通過した言語 (スペイン語、フランス語、イタリア語等) に分類可能と考える。本稿では、更に後者のグルー

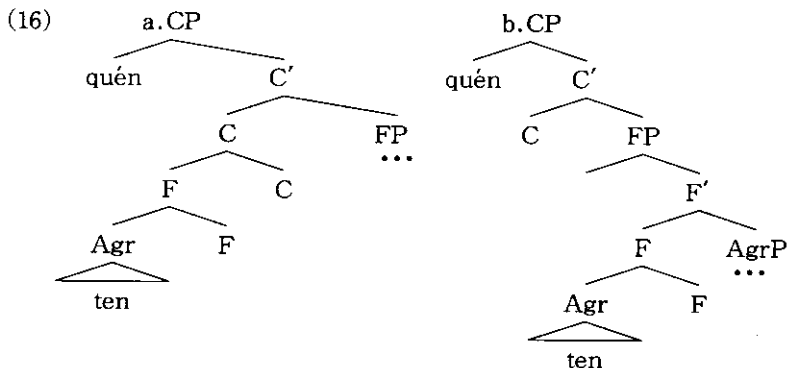
(当該 Agr の複合体が F 位置へ移動する理由がない)。また、(13) の CP は、Main Clause であるので、P にも V にも統率されない。つまり、C と F への CL が許容されない。結果として、cl は Agr の付加構造に対して上位右方付加することになる。これにより、(13a-b) の相違が説明される。一方、(14) の embd. CP は V によって統率される。つまり、C と F への CL が許容される。この場合、embd. C が語彙的に *que* で実現されているため、当該 C への CL は排除される (仮説 α (c))。 (14) においても、Agr の複合体はそれが基底生成された位置にとどまっている (F 位置へ移動していない)。一方、CPC によって Agr の複合体への上位付加が許容されない。結果として、CL は F への (上位) 付加によってのみ発動することになる。本稿の仮説群は、(13) と (14) の相違を適切に説明すると思われる。次に、WH 要素移動が適用された場合の CL を検討する。

4. WH 要素移動

ガリシア語では、WH 要素が SPEC (C) 位置へ移動した場合に Subject-Verb Inversion は義務的に発動する。また、一般的に当該 WH 要素移動に伴って Agr の複合体も F を経て C 位置へ移動すると考えられる (V-Preposing)。しかし、WH 要素移動すべてにおいて、Agr の複合体が C 位置まで移動する必要はないと考えられる。Agr の複合体が F 位置で移動を停止することも可能と思われる。以下の (15) の事例を検討する。

- (15) a. *quén o ten ouvido?* 'who has heard it?' [U: 351]
 b. **quén ten o ouvido?*
 c. *como se chama o teu pai?* [C: 10a]
 d. **como o teu pai se chama?* [C: 10b]
 e. **como o teu pai chámase?* [C: 10c]
 'what is your father's name?'

最初に、(15a) を検討する。(15a) において、Agr の複合体が F を経由して C 位置まで移動すると考えると (16a) の構造が想定される。



この場合には、C の付加構造に対する上位右方付加による CL のみが考えられる。しかし、この CL は (15b) を生成する。つまり、文法的である (15a) は生成不能である。Agr の複合体が F を経由して C 位置へ移動する理由は何であろうか。機能範疇である C はその sister である FP を L 標示しない (FP=bar.)。この AgrP の bar. 性を相殺するために語彙的要素である V を含む Agr の複合体が C 位置へ移動すると考えられる。しかしながら、FP の bar. 性を相殺する手段が更に考えられる。

F はその sister である AgrP を L 標示しない (AgrP=bar.)。Agr の複合体が F 位置まで移動し、その位置にとどまると考えてみよう (16b)。この移動により、AgrP の bar. 性が相殺される。問題となるのは FP の bar. 性である。ここで、cl (o) が C に対して上位 (右方) 付加可能と考えてみよう。当該付加によって、FP の bar. 性が相殺される (cf. Ouhalla (1989))。¹⁶⁾次ぎに、WH 要素移動における主語 NP の生起する位置について考える。前述のように、WH 要素移動では、Subject-Verb Inversion が義務的である。つまり、(16b) の構造において、主語 NP の SPEC (F) 位置への移動は許容されない (15c-d)。ここで、ガリシア語の SPEC (F) と SPEC (C) 位置が共に A' 位置とを考えてみよう。この場合、SPEC (F) 位置に移動した主語 NP (*o teu pai*) が WH 要素移動に対する Relativized Minimality bar. となるであろう (主語 NP の移動の後に WH 要素移動が適用されると考える必要がある)。結果として、主語 NP は A 位置である SPEC (Agr) 位置にとどまることになる。この論法は、WH 要素移動における Subject-Verb Inversion を適切に説明すると思われる。CL が発動しない文脈では、Agr の複合体が F を経由して C 位置へ移動することになる。¹⁷⁾次ぎに、Left Dislocation と

Focalization の事例を検討する。

5. Left Dislocation と Focalization

本稿で言う Focalization は, Campos (1989) と Campos & Zampini (1990) の Contrastive Focus (CF) に対応する。Informational Focus (IF) は本稿の Left Dislocation に対応する。本稿では, Campos (1989) と同様に, Left Dislocation (IF) を A' 位置への移動と考える (Campos (1989) では, SPEC (C) 位置への移動, つまり WH 要素移動と前提される)。Focalization (CF) を適用される要素は CP に付加した位置に基底生成されると考えられている。¹⁸⁾最初に, Campos (1989) の論法を提示する。その基本前提は, (17) として要約される。

(17) Campos (1989) の基本前提

- (a) Clitics in modern Gallegan, as clitics in modern Spanish and Romance in general, are not in a position internal to the verb, but rather that they are generated in preverbal position and that they form a morphological unit with the verb itself.

[C: 16]

- (b) Clitic Inversion (in PF) :

$[_{IP} (NP) cl V] \rightarrow [_{IP} (NP) V-cl]$ if IP is a main clause.

[C: 17]¹⁹⁾

- (c) In Gallegan, WH-movement triggers movement of V^0 to C^0 .

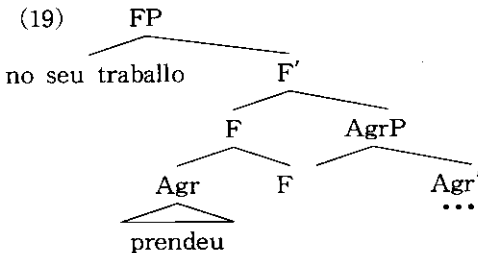
[C: 19]

ここで, 以下の IF (Left Dislocation) の用例を検討する (IF の適用を受ける要素には 2 重波線と付す。CF (Focalization) のそれは大文字で示す)。

- (18) a. no seu traballo o prendeu a policía [C: 14a]
 b. *no seu traballo a policía o prendeu [C: 14b]
 c. *no seu traballo a policía prendeuno [C: 14c]
 d. *no seu traballo prendeuno a policía
 'in his job the police caught him'

IF を SPEC (C) 位置への移動と前提すると, PP (*no seu traballo*) が SPEC (C) 位置へ移動することになる。それに伴い [cl+V] の単位が C 位置へ移動する (17c)。結果として, Clitic Inversion が発動せず, Proclisis (CL) が予測される。一般的に, IF では Subject-Verb Inversion が義務的である。(18b-c) では, 最大範疇である主語 NP (*a policía*) が移動する Slot が存在しないため, 非文と予測される。²⁰⁾

これまで設定された本稿の仮説群により (18) は説明されるであろうか。最初に, IF (Left Dislocation) の事例を SPEC (C) 位置への移動前提してみよう。これは, WH 要素移動の箇所でも検討した本稿の (15) と同じ状況となる。つまり, C への上位付加と主語 NP が SPEC (F) 位置へ移動した場合の Relativized Minimality により, (18) の事例は説明可能となる。しかしながら, 本稿では IF (Left Dislocation) を SPEC (F) 位置への移動と考える。この前提の下では, (18) の基本構造として (19) が想定される。SPEC (F) 位置への移動に対しては, Morphological Incorporation (MI) の回数に関する経済性 (Economy) が発動しないと前提される。つまり, Agr の複合体が F 位置まで移動する。



(19) では, 主語 NP (*a policía*) の SPEC (F) への移動が排除される。つまり, 当該主語 NP は SPEC (Agr) 位置にとどまる。これにより, IF における Subject-Verb Inversion が説明される。問題となるのは, CL の方向性である。これまで, [+Finite] CP 中で上位右方付加が発動すると前提されてきた。この前提は, (18d) を文法的と予測することになる。²¹⁾最初に, IF では特別に上位左方付加が発動すると考えられる。しかしながら, 本稿では IF の特殊性でなく, F への CL の特殊性によりこの問題を打開する。そこで, 以下の仮説を設定する。

(20) 仮説 γ

F への CL は上位左方付加によって発動する。²²⁾

これまで検討された不定法 CP と [+Finite] CP における CL 事例の中で、F への CL が適用されたものはすべて、付加構造でなく単一構造を形成する F に対する用例であった。単一構造を形成する付加は当然のことながら上位付加によるものであり、その方向性の相違が S 構造に影響を及ぼすことはない（同様に、C の付加構造に対する CL も存在しないと考えられる）。仮説 γ は (18) の用例を適切に説明する。

次に、CF (Focalization) の事例を検討する。CF における Subject-Verb Inversion の適用は随意的である（当該 Inversion がより好まれる）。²³⁾また、CL (Enclisis) が観察される。

(21) a. O LIBRO, mercoumo Xoan onte (e non o cuaderno)

[C: 16a]

‘THE BOOK, Xoan bought it for me (and not the notebook)

b. OS COITELOS, eu trouxenos (e non os tenedors)

[C: 16c]

‘THE KNIVES, I bought them (and not the forks)

CF を適用される要素は、CP に付加した位置に基底生成されると前提される（つまり、移動によらない）。結果として、(21) の CL は WH 要素移動を伴わない [+Finite] CP 中のそれと同様の取扱いがなされる（本稿の第 3 節）。結果として、(21b) は基底生成された Agr の複合体に対する上位右方付加による CL で説明される。(21a) は問題を惹起する。(21a) においては、Agr の複合体が F 位置へ移動する理由がない。仮に F 位置へ移動する場合には、(21a) でなく、以下の (22) が生成される（仮説 γ により、F の付加構造に対する上位左方付加が発動する）。²⁴⁾

(22) *O LIBRO, mo mercou Xoan onte (e non o cuaderno)

(23) で観察されるように、否定の副詞・代名詞が前置された場合には CL (Proclisis) が発動する（(23) の用例以外にも *xamais* (never) がある）。ま

た、ある種の不定代名詞・形容詞の場合も CL (Proclisis) が観察される (*ambos* (both), *calquera* (any) と *todo(s)* (all) も含まれる). ²⁵⁾

- (23) a. ninguén me dixo que viñera. [C: 18a-d]
 'nobody told me to come'
 b. nunca lle faltan trompazos a desgraciada da muller.
 'the poor woman never fails to get her blows'
 c. tampouco che quería.
 'neither did she love you'
 d. endemais lle falou.
 'never did he talk to her'
- (24) a. algo lle pasará [C: 26a-b]
 'something will happen to him'
 b. alguén nos dixo que corríamos perigo
 'somebody told us that we are in danger'

Campos (1989) と同様に、この種の副詞・代名詞と代名詞・形容詞の挙動はその SPEC (F) 位置への移動が義務的と前提することにより説明される。つまり、これらの要素は義務的に IF (Left Dislocation) の適用を受けることになる。ここで、(23-24) 中の問題要素が SPEC (F) (Campos (1989) においては、SPEC (C)) 位置へ移動することを証明する必要が生まれる。 ²⁶⁾

- (25) a. pan merquei no supermercado. [C: 20a]
 'I bought bread at the supermarket'
 b. *pan merquei NO SUPERMERCADO (e non na panadería)
 [C: 20b]
 'I bought bread IN THE SUPERMARKET'
 c. maña mercaremos CULLERES (e non coitelos)
 [C: 21a]²⁷⁾
 'tomorrow we will buy SPOONS'
 d. onte mercamos DETERXENTE (e non xabón)
 [C: 21b]
 'yesterday we bought DETERGENT'

e. *nunca mercaremos CULLERES (senón coitelos)

[C: 22a]

'never will we buy SPOONS'

f. *tampouco visitou SANTIAGO (senón Vigo) [C: 22b]

'neither did he visit SANTIAGO'

g. *xamais se puxeron LEDOS polo viño (senón tristes)

[C: 22c]

'never did they become HAPPY with the wine'

h. non mercaremos CULLERES (senón coitelos)

[C: note 20]

'we will not buy SPOONS'

i. *ninguén convidou A REMEDIOS (senón a mercedes)

[C: 23a]

'nobody invited REMEDIOS'

(26) a. *alguén mercou PAN (e non queixo) [C: 27a]

'somebody bought BREAD'

b. *algo lle pasou A XOAN (e non a Marfa) [C: 27b]

'something (to him) happened to XOAN'

Campos (1989) の証明は、以下の前提による。本稿では、(28) の仮説を設

(27) It is possible to interpret only one focus at a time,
either informational or contrastive. [C: 24]

定することにより (25-26) が説明される。

(28) 仮説γ'

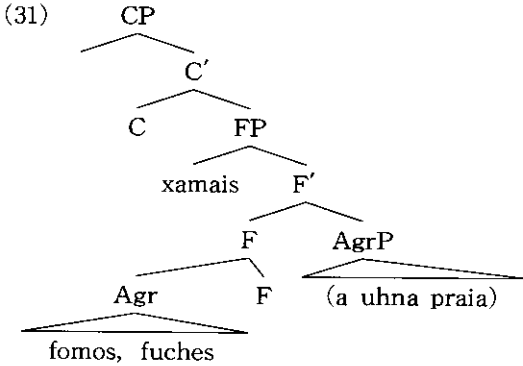
- (a) 基底生成された位置で Contrastive Focus の素性を担う要素は、LF において SPEC (F) 位置へ移動する (S 構造の段階で既に SPEC (F) 位置に要素が生起する場合には、当該移動が阻止される → 非文と解釈される)。
- (b) 最大範疇である要素のみが Informational Focus の素性を担う。(最大投射のみが SPEC (F) 位置へ移動可能)

(27) と (28) の予測がもたらす最も重大な相違点は (25c-d) に関するものである。本稿の仮説群では、(25c-d) 中の副詞 (*maña, onte*) には2通りの解釈が可能である。当該副詞が CF の適用を受けた解釈と受けない場合のそれである。(27) の前提の下では、CF の解釈は許容されない。これに関しては未調査であるが、恐らく (28) を前提にした場合の予測が妥当するであろう。

Campos (1989) は、IF (Left Dislocation) が SPEC (C) 位置へ移動と捉えることにより以下の用例の文法性判断を説明する。

- (29) a. xamais fomos a unha praia [C: 24a-d]
 'never did we go to a beach'
 b. *onde xamais fuches?
 'where did you never go?'
 c. *xamais onde fuches?
 'where did you never go?'
 d. onde non fuches xamais/nunca?
 'where did you never go?'
- (30) a. ? *un Ribeiro branco nunca tomamos. [C: 25a-c]²⁸⁾
 'a Ribeiro white never did we drink'
 b. *nunca un Ribeiro branco tomamos.
 'a Ribeiro white never did we drink'
 c. *un Ribeiro branco non tomamos nunca.
 'We never drank a white Ribeiro'

本稿の仮説群は (29-30) を適切に説明する。(29a-c) は以下の構造を有する。



IF を適用される要素 (*xamais*) の移動を可能にするため、Agr の複合体が F 位置へ移動する。(29b) では更に WH 要素である *onde* が SPEC (C) 位置へ移動している。C がその sister である FP を L 標示しないため、当該 AgrP は bar. を構成する。当該 AgrP の bar. 性を相殺するために、Agr の複合体が F 位置から更に C 位置へ移動すると考えてみよう。AgrP の bar. 性は相殺されるが、SPEC (F) 位置にある *xamais* が Relativized Minimality bar. を構成することになる。(29c) では、WH 要素が移動する Slot が存在しない。(30a-b) は SPEC (F) 位置には単一の要素が移動可能であるという前提によって排除される。Campos (1989) では、上の (29-30) の事例は Doubly-Filled COMP Filter で排除される。しかしながら、この論法は、IF と WH 要素移動が共に SPEC (C) 位置への移動と捉える限り、以下の (30d) を説明できない。

- (30) d. *hai quen nunca saberá o que é iso* [C: note 21]
 'there are people who will never know what that is'

ところで本稿の仮説群によって、上の事象は説明可能であろうか。スペイン語に関し Torregg (1984) が指摘するように、関係節中では V-Preposing の適用が義務的でない (V-Preposing を Agr の複合体の F 位置を経た C への移動と捉える)。また、SPEC (C) 位置へ移動したすべての WH が V-Preposing の引き金になるわけでない。以下の (30e) で観察されるように、*por qué* (why) の場合には、V-Preposing の適用が随意的である。

(30) e. Ella se pregunta por qué TANTA CHORRADA dirán

[U: 100]

'she wonders why SO MUCH CRAP they say' ²⁹⁾

(30d-e) に共通するのは、ある一定の *embd.CP* 中では *Agr* の複合体が *F* 位置を経て *C* まで移動する必要がない点であろう。換言すれば、*Agr* の複合体は *F* 位置に移動してその位置にとどまることが可能なのである。この場合、(30d-e) において、*C* の *sister* である *FP* の *bar. 性* を相殺するプロセスを前提する必要がある。少なくとも、*IF* を *SPEC (F)* 位置への移動と前提し、関係節 *CP* においてスペイン語とガリシア語が類似の挙動を示すと仮定した場合には (30d) の問題も解決可能と考えられる（更なる検討は、稿を改める）。

本稿の仮説群で問題となるのは、(29d) と (30c) である。いずれも否定語 (*non*) が生起する事例である。第6節では、この *Neg (non)* について検討する。

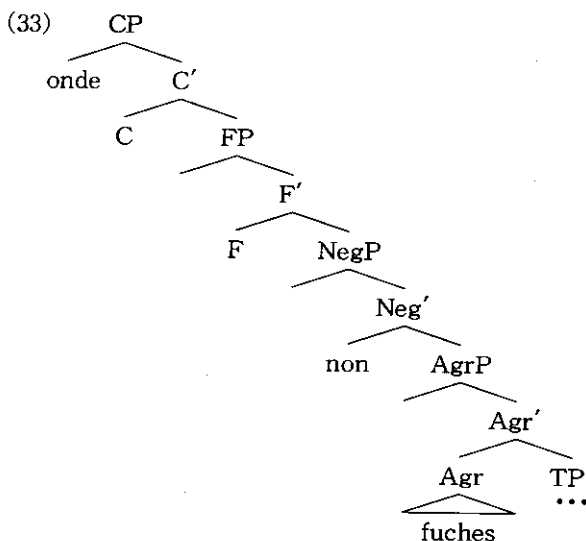
6. *Neg (non)*

仮説 α の (a) で提示したように、*Neg (non)* は X^0 範疇に属し、独自の (最大) 投射 (*NegP*) を形成する。*Neg (non)* が X^0 範疇であることから、当該要素に対する *IF* の適用は許容されない (仮説 γ' (b))。ここで、(29d) を検討する。その基本構造として、以下の (33) が想定される。

WH 要素 (*onde*) の移動を可能にするためには、*FP* から *AgrP* までの最大投射の *bar. 性* を相殺する必要がある。この *bar. 性* 相殺が *Agr* の複合体によってなされないことは (29d) の語順からも明らかである。本稿では、 X^0 範疇である *Neg (non)* に、この *bar. 性* 相殺を求めて以下の仮説を設定する。³⁰⁾

(32) 仮説 δ

- (a) *Neg (non)* は独自の (最大) 投射を形成する X^0 範疇である。
- (b) *Neg (non)* はその *sister* である *AgrP* を *L* 標示する。
- (c) *Neg (non)* の *F* への主要部移動は義務的に発動する。
- (d) *Neg (non)* を含む *F* に対する *CL* の方向性は逆転する。³¹⁾



仮説δにより、Neg (*non*) が F 位置まで移動した時点で AgrP と NegP の bar. 性が相殺される。F 位置から更に C 位置へ移動することにより、FP の bar. 性も相殺される。つまり、WH 要素 (*onde*) は如何なる bar. も通過することはない。よって、(29d) 中の当該 WH 要素の移動は空範嚙原理 (ECP) を満足し、文法的と予測されることになる。³²⁾ (30c) も同様に、文法的と予測される。(29d) と (30c) において、Agr の複合体が基底生成された位置にとどまっている点に留意されたい。

[+Finite] CP において、当該 CP が P あるいは V に統率された場合でもそうでない場合でも、Neg (*non*) が生起する時の CL は動詞形態に先行する位置に対してなされる ((34d-e) は EP の用例)。

- (34) a. Xoan non chas quer 'Xoan does not want them' [C: 41a]
 b. *me non gusta 'I don't like it' [C: 40a]
 c. non me gusta
 d. é porque não o conheço [T: 91]
 e. é porque o não conheço [T: 91]³³⁾
 'it's because I don't know it'

最初に, Main Clause 中の用例である (34a-c) を検討する。(34a, c) は, Neg (*non*) の移動によって生成した F の付加構造への上位右方付加 (CL) で説明可能である。(34b) も同様に説明される。(34b) は更に cl が文頭に生起しないことを説明する (Neg (*non*) を伴う否定文において), 肯定の Main Clause でも同様に, cl の文頭での生起が許容されない。Main Clause は P, V によって統率されない。つまり, 当該 CP 中の単一構造を形成する C と F への CL が許容されない。Agr の複合体への上位右方付加が許容されるだけである。同様の論法により, (34d) も説明可能である。問題なのは, EP の事例である (34e) である。C は *porque* の形態で実現されている。よって, 当該 C への CL は排除される。本稿の仮説群では (34e) が生成不能である。³⁴⁾

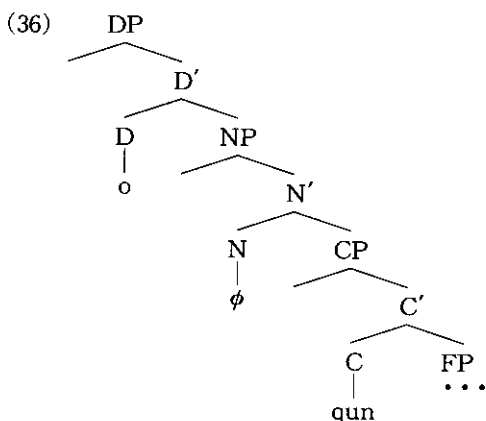
7. 結語

以上で, ガリシア語における CL の基本的事例について初歩的な考察がなされた。ガリシア語の CL は他のロマンス諸語のそれに比べ, かなり複雑なプロセスによって発動するように思われる。本稿の第2節で概略したように, CL に関するロマンス諸語の進化段階を単純化・統一化と考え, 同時に, ガリシア語がより古い進化段階にとどまっているとすれば, 当該言語における複雑な CL 上のプロセスも理解可能であろう。本稿において, 更に検討すべき問題の所在が明らかとなった。これらの問題を更に検討し, 本稿で設定された仮説群の修正, あるいは廃棄が必要となることは言うまでもない。最後に, Campos (1989) の枠組みで説明不可能と思われる用例と, 本稿の仮説群にとって問題となる用例について検討する。

- (35) a... nunca me eu suxeitara [C: 38a]
 'I wish I had never subdued myself'
 b. fai o que che eu digo [C: 38b]
 'do what I tell you'
 c. eu xa te entendo [C: 41b]
 'I understand you now'

(35a) 中の副詞 (*nunca*) は SPEC (F) 位置へ移動しているとは考えられない。当該位置へ移動している場合には, Agr の複合体が F 位置へ移動することになる。その結果として, 主語 NP (*eu*) が移動する Slot が存在しな

いことになる。また、IF の事例と考えられるため、Subject-Verb Inversion が発動することになる。しかし、(35a) では主語 NP が Agr の複合体に先行する。この場合も、*nunca* が SPEC (F) 位置へ移動するとは言えない。副詞 (*nunca*) が FP に左方付加した位置に生成されると前提する (動詞形態と主語はそれぞれ、Agr と SPEC (Agr) 位置にある)。動詞 (*suxeitara*) が接続法で実現されている点に留意されたい。³⁵⁾仮に、独立節 (接続法) が非顕在的な V によって統率された CP と分析してみよう。また、(35a) の場合の CP の主要部は削除されていると考える (これを、© と表記する)。この前提が妥当するならば、(35a) では、V に統率された embd.CP 中のそれと類似の挙動が期待される。CPC の適用により、Agr の複合体への上位右方付加は許容されない (© への付加も排除されると考える)。(35b) も問題を惹起する。(35b) 中の関係節を以下のように分析する (D=Determiner)。



この場合の CP は、P, V に統率されない。そこで、本稿の仮説 α (d) を以下のように修正する。

- (37) 一般的に、 $[\pm V, \pm N]$ によって統率される CP 中にある単一構造の C と F への CL も許容される。

上の前提により、(35b) における embd.CP 中の F に対する CL が可能となる (主語と動詞形態の位置は (35a) と同様)。que が移動によって SPEC

(C) 位置へ移動するとしても、本稿の (30) の用例で指摘したように、何らかのプロセスによって FP の bar. 性が相殺される必要がある。³⁶⁾

(35c) は、以下のように説明される (副詞 (*xa*) は F' に左方付加した位置に生成される)。主語 NP (*eu*) は SPEC (F) 位置へ移動している。(35c) は IF の事例と考えられる。つまり、Agr の複合体は F 位置へ移動している。C と Agr への CL は許容されない。当該 CP は [±V, ±N] によって統率されない。また、Agr の付加構造は最上位に位置していない。つまり、F の付加構造に対する上位左方付加に CL が発動することになる (本稿の (20))。

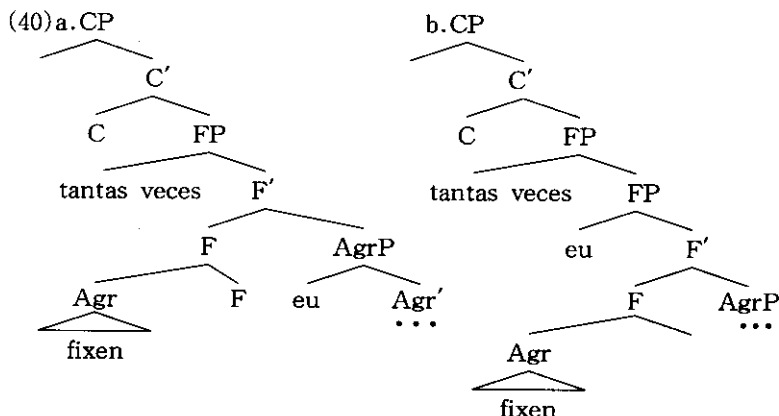
最後に、Uriagereka (1988) が CF (Focalization) の事例としている (38) を検討する。

- (38) a. tantas veces o eu fixen [U: 355]
 b. tantas veces eu o fixen [U: 511 note 25]
 'so many times I did it'

本稿では、CF (Focalization) を CP へ基底生成付加と前提している。この前提では、(38) が生成不能である。代わりに、(39) が生成される。

- (39) tantas veces eu fixen-o

恐らく (39) は非文であろう。本稿では、(38) を IF の適用例と考える。その基本構造として (40a) が想定される。



つまり、付加構造を形成する F への上位左方付加によって CL が発動する。これは、(38a) を適切に生成する。(38b) は問題を惹起する。(38b) の用例を (40a) の構造から派生できない。更に詳細な検討を必要とするが、本稿では (40b) をその基本構造として想定する。副詞 (*tantas veces*) は FP に左方付加した位置に生成され、主語 NP (*eu*) が IF (Left Dislocation) の適用を受けている。つまり、この場合もまた、F への上位左方付加の CL によって説明可能であろう。

註

- 0) 本稿の Anonymous Reviewer から Campos (1989) での誤り (誤植) と Campos (1989) の用例の転写における本稿著者の間違い等に関する指摘がなされた。ここに、感謝の意を表する次第です。
- 1) ガリシア語と基本的に同じ挙動を示すとされるヨーロッパポルトガル語 (EP) の用例も勘案される (U の用例は EP のそれ)。この EP からの用例は Rouveret (1989, 以下で R と略記) と Teyssier (1984) からも引用される。
- 2) 機能範疇の最大投射 (FP) は, Uriagereka (1988) のそれと同種のものであろう。SPEC (F) 位置には [+Focus] 素性を担う最大範疇と主語 NP が移動可能である (主語 NP の SPEC (F) への移動に関しては後述する)。ModalP と AspP はそれぞれ、ModalP と AspectP を表す。両者に関しては、Ouhalla (1991) を参照されたい。迂言的完了形においては、その助動詞要素は T 位置に挿入され、順次 Agr 位置まで主要部移動すると考えられる。また、V は Asp 位置へ移動し、過去分詞として実現され、その位置にとどまる。
- 3) Kayne (1991) を参照されたい。
- 4) 後述する WH 要素移動に関する主要部移動の回数の経済性 (Economy) に対してはこの限りでない。また、付加構造に対しては、UG の一般条件が許す限り上位の構造に付加移動すると考える (註 6 と 15)。
- 5) Head Movement Constraint:

A head category can only move to the head position immediately preceding it. (Ouhalla 1991: 43)

Relativized Minimality:

X antecedent-governs Y only if there is no Z such that

- (i) Z is a typical potential antecedent-governor for Y, and
- (ii) Z m-commands Y and does not m-command X.

(Ouhalla 1990: 196)

Antecedent Government:

X antecedent-governs Y iff

- (i) X and Y are coindexed
- (ii) X m-commands Y
- (iii) no barrier intervenes
- (iv) Relativized Minimality is respected (同上)

- 6) Clitic Placement Constraint (CPC):

Clitics must attach/move to the highest affixal element in their construction,

(general principles of UG (i.e.ECP) allowing (Ouhalla 1989: 178)

- 7) 迂言的完了形の場合は、T 位置に挿入された助動詞要素が Agr 位置まで主要部移動した時点で SPEC-HEAD Agreement が適用される。
- 8) estudar (study) の屈折不定法の形態を以下に示す (EP) (斜字体は屈折語尾)。

eu estudar ϕ	nós estudar <i>mos</i>
tu estudar <i>es</i>	vós estudar <i>des</i>
êle estudar ϕ	êles estudar <i>em</i>

以下は、ガリシア語のそれである (estudiar)。

eu estudar ϕ	nós estudar <i>mos</i>
tu estudar <i>es</i>	vós estudar <i>des</i>
el estudar ϕ	eles estudar <i>en</i>

後述するように、[+Tense] CP 中では上位右方付加が想定される。

- 9) 障壁 (Barrier) を以下で bar. と略記する。
- 10) (4b) と (4c) については後述する。
- 11) (6b) は Uriagereka (1988) で引用されていない。この文法性判断は、以下の Teyssier (1984) のポルトガル語に対する説明から推測したものである。
(T 1984: 93) :

"La proclise et l'enclise sont en général toutes deux correctes,... Mais l'infinitif fléxioné entraîne obligatoirement la proclise,..."

- 12) 本稿では、Gerund の用例が取り扱われない。ポルトガル語と同様に、Enclisis (CL) が発動するように思われる。(i) は Teyssier (1984: 94) による EP の用例である。

- (i) a. fugiu atirando-se à água
'he escaped throwing himself into the water'
- b. não o encontrando em casa deixei de o procurar
'as I didn't find it in the house, I stopped to look for it'
- c. em se cansando,... 'if you are tired,...

Gerund 形態は、V が Pas, T を経て Agr 位置まで移動することにより生成されると考えられる (この点で、迂言的完了形の過去分詞と異なる)。(i a) は、Agr の付加構造に対する下位付加によって説明可能であろう。(i b) では、Neg (*não*) が生起する。後述する仮説により、当該 Neg の F への移動は義務的に発動する。(i a-b) の CP は P, V に統率されない。よって、(i b) では F の複合体に対する上位右方付加により CL が適用される。(i c) の CP は P (*em*) 統率されるため、C あるいは F への単一構造への付加が可能となる。CPC の適用により、C への付加 (CL) が発動することになる (詳細は後述)。

- 13) ポルトガル語の直説法未来形と条件法では、cl が語幹 (非屈折不定法形態と同形) と語尾の間に生起する。

- (i) dar-te-ei o presente amanhã
'I'll give you the present tomorrow'
- (ii) vendê-los-famos 'we would sell them'

上例において、動詞変化形は Agr の位置にあると考えられる。その場合、CL は Agr の付加構造への下位左方付加によって発動することになる。後述するように、[+Finite] CP 中では上位右方付加が前提される。その点で、上の (i, ii) は問題を惹起することになる (これに関しては、稿を改める)。

- 14) 本稿では、(10c) の検討がなされない。屈折不定法が SPEC (F) あるいは SPEC (Agr) 位置にある主語 NP に主格を付与することには問題がないであろう。非屈折不定法の場

合はどうであろうか (この場合, Agr の複合体は F 位置へ移動していない)。また, 非屈折不定法では, Agr SPEC (Agr) 位置にある NP に主格を付与しないと考えられる。更に詳細な検討が必要であるが, 本稿では以下のように考える。Agr の複合体あるいは cl が F 位置へ移動した場合, 当該 F は SPEC (F) あるいは SPEC (Agr) 位置に移動した NP に主格を付与する。この前提の下では, 以下の (i) は生成不可能 (非文) と予測される (未調査)。

(i) pra vo-los dous ouvi-lo...

15) Campos (1989: 35) :

"... Some Romance languages, like Spanish, Catalan, Brazilian Portuguese, Provençal, French, Italian and Rumanian, have passed through a stage similar to the present Gallegan stage regarding clitics, while other Romance languages like Peninsular Portuguese and Bable are at a similar stage."

U (1988: 233-237) では, Incorporation を Syntactic Incorporation (SI) と Morphological Incorporation (MI) に分類する。CL が前者に対応し, 後者の例として動詞形態の形成が挙げられる。Incorporation は上位付加によって発動し, SI では右方付加により, MI は左方付加によって適用されると考えられている。後述する CL に関するロマンス諸語の進化段階を SI の MI への統合化と解釈可能であろう。本稿においても, MI は一律に上位左方付加によって発動すると前提される。

16) CL に対して Relativized Minimality が関与しないと前提される点に留意されたい。また, Morphological Incorporation (MI) の回数の軽減が経済性 (Economy) と関連するならば, (16b) の派生が (16a) のそれよりも経済的ということになる。この経済性に関与する MI は F から C への主要部移動に対して (WH 要素移動に対して) 発動すると考えられる。この場合, 本稿の註 (5) で示した CPC の定義における, UG の一般原理として ECP に加え経済性 (Economy) も勘案する必要が生まれる。

17) 間接疑問文では問題が起こる。ガリシア語が EP と同様の挙動を示す, つまり, 間接疑問文において SVO と VSO が自由交替するならば, 何らかのプロセスによってその SPEC (C) 位置に WH 要素が移動した場合の C に L 標示機能を付与しなければならない (以下は EP の用例 (T: 127))。

(i) a. queria saber por que motivo o gerente não disse nada

'I would like to know for what reason the manager told me nothing'

b. queria saber por que motivo surgiram aquelas dificuldades

'I would like to know for what cause those difficulties arose'

(i a) において, Agr の複合体が C 位置まで移動しているとは考えられない (この場合, C の sister である FP が bar. となる)。更なる検討を要する。

18) スペイン語に関して, Campos & Zampini (1990) は Left Dislocation (IF) を CP への左方付加 (基底生成) と, Focalization (CF) を SPEC (C) への WH 移動を前提する。ガリシア語と異なり, スペイン語では IF が CF に先行する (ルーマニア語も同様)。よって, スペイン語では CF を適用される要素が単独であり, IF のそれが複数生起可能と予測される。ガリシア語では, その反対の挙動が観察される。IF を適用される要素が単独と予測される (SPEC (C) 位置に単一の要素が移動可能という前提の下で)。

19) Campos (1989) では, 従来 IP と同定される要素の細分化は前提されていない。本稿では, 便宜上 IP を FP と読み換える。

20) Campos (1989) の基本前提 (17) により, Main Clause と embd. Clause 中でのそれぞれ Enclisis と Proclisis が説明可能である。不定法節中での CL に関しては問題を

残す。

- 21) 本稿の論法は、WH 要素移動と IF との共起を非文と予測する。IF によって A' 位置である SPEC (F) へ移動した要素が Relativized Minimality bar. を形成する。Campos (1989) は、当該事例を Doubly-Filled COMP Filter で排除する。
- 22) この仮説は、Uriagereka (1988) が挙げるカリシア語の IF の用例に基づく。
- (i) dixen que este concerto, ouvin-o, [U: 351]
 'I said that this concert, I hear it'
- (i) では、IF の事例であるとするれば、*este concerto*_i が SPEC (F) 位置へ移動していると考えられる (Agr の複合体も F 位置へ移動している)。つまり、F の付加構造に対する上位右方付加を前提する必要がある。一方で、Enclisis (CL) は Main Clause での CL と類似する。同時に、CF (Focalization) の事例にも類似する。本稿では、Uriagereka (1988) と異なり、(i) を CF (Focalization) の事例と解釈する。この場合、SPEC (F) 位置にある *este concerto*_i は当該位置に基底生成されることになる。明らかに、embd. CP は matrix V によって統率される。しかし、ここでは embd. F への CL を排除する必要がある。そこで、記述的ではあるが、以下の予備仮説を設定することにする。
- (ii) 予備仮説:
 P あるいは V によって統率される CP 中では、C あるいは F への CL が許容されるが、その SPEC 位置に要素が基底生成される場合には、単一構造を形成する当該 C と V への CL が排除される。
- この前提が妥当するならば、上の (i) は Agr の複合体への上位右方付加による CL として説明されることになる。
- 23) Campos (1989: 21)
- 24) この問題に関しては稿を改める。1つの打開策として、カリシア語では一定条件下で Agr の複合体が SPEC (T) 位置にある NP に主格を付与すると前提される (更なる調査が必要)。
- 25) EP での対応事象については Teyssier (1984: 90-92) を参照されたい。
- 26) Numerical Quantifier に伴う主語 NP に関する Proclisis と Enclisis は省略する。Campos (1989: 31-32) を参照されたい。
- 27) Campos (1989: 24) は、(27) の前提を設定する関係で、副詞 (*maña, onte*) に対して CF (Focalization) を適用できない。そこで、当該副詞が IP 外部に基底生成され则认为。後述するように、本稿では (25c-d) の当該副詞は CF の適用によって CP に付加された位置に基底生成されると前提される。(25h) 中の否定語 (*non*) については後述する。本稿では、当該 *non* が最大範疇でなく X⁰ 範疇と前提される。
- 28) Campos (1989) と異なり、本稿の Anonymous Reviewer は (30b) を文法的と判断する。この判断に関しては更に調査の必要がある。
- 29) Uriagereka (1988) は (30e) を CF (Focalization) の事例と考える。また、SPEC (F) 位置に基底生成された *TANTA CHORRADA* が WH 要素 (*por qué*) に対する Relativized Minimality bar. とならないと前提する必要がある (SPEC (F) に移動した (30-d) の *nunca* についても同様)。ここで、IF においては、Agr の複合体が F 位置へ移動し且つその位置にとどまることが必須と考えて、以下の予備仮説を設定することにする (更なる検討を要す)。
- (i) 予備仮説: embd. CP において、V-Preposing を義務的とする場合には CF (Focalization) が許容されない。
- 仮説 (i) は以下の予測を可能にする (未調査)。

(ii) *ella se pregunta quién TANTA CHORRADA dirá

- 30) 仮説は、ルーマニア語に関する石岡 (to appear) でも設定される。
- 31) つまり、Neg (*non*) を含む F の付加構造に対しては、上位右方付加によって CL が発動することになる。Neg (*non*) の F への移動は MI (morphological Incorporation) と前提される。CL を SI (syntactic Incorporation) と考えると、MI が完了した時点で SI が適用されることになる。
- 32) Relativized Minimality Barrier に関する定義体系と ECP に関しては、Rizzi (1990), Cinque (1990), Ouhalla (1991) 等を参照されたい。本稿では、ECP が先行詞統率に一元化される。Rizzi (1990) の論法に従えば、(23-24) の WH 要素が Referential Expression とする前提の下では、SPEC (F) 位置にある主語 NP は Binding に対する bar. を形成することになる。
- 33) (34e) の語順は、embd. CP でのみ観察されるものと思われる。この語順がガリシア語にも存在するかどうかは不明である。本稿の Anonymous Reviewer は、以下の (i) の用例を指摘する。

(i) mire que eu lle non podo 'see that I can't do it'

- 34) (34e) は、ある一定の条件下で embd. CP 中の Neg (*não*) の F への義務的移動が緩和されると考えることにより説明可能であろう。その場合、当該 CP は V に統率されるため、F への付加 (CL) が可能となる。しかしながら、以下の用例はこの論法に問題を惹起する (以下の用例は、Cuesta & Mendes (1971) による)。

(i) a. como não lhe deste o livro, não o leu
b. como lhe não deste o livro, não o leu
'as you didn't lend him the book, he didn't read it'

(ii) a. porque não lho emprestas?
b. porque lho não emprestas?
'why don't you lend it to him?'

換言すれば、一定の条件下で MI における移動回数に関する Economy が適用されることになる (これに関しては、更なる論考が必要)。

- 35) ガリシア語の *andara* (*suxeitara*) 形態は本来直説法大過去であるが、接続法半過去としても機能する。
- 36) (35a-b) の用例は、主語 NP が人称代名詞の場合の限定される (C: 34) 本稿では、この限定は説明不可能である。

参考文献

- Campos, H (1989) "Clitic Position in Modern Gallegan." *Lingua* 77, 13-36.
- Campos, H. and M. Zampini (1990) "Focalization in Spanish." *Probus* 2, 47-64.
- Chomsky, N. (1986) *Barriers*. MIT Press, Cambridge (Mass.).
- Cinque, G. (1990) *Types of A' -Dependencies*. MIT Press, Cambridge (Mass.).
- Cuesta, P.V. and Mendes, M. A. (1971) *Gramática Portuguesa*. Gredos, Madrid.
- Hernanz, M.L. and J.M. Brucart (1987) *La Sintaxis*. Editorial Crítica, Barcelona.
- 石岡精三 (to appear) 「ルーマニア語の CP 構造に関する初歩的論考 - Motapanyane (1989) の再解釈」 長岡技術科学大学 「言語・人文科学論集 6」.
- Kayne, R.S. (1991) "Romance Clitics, Verb Movement, and PRO." *Linguistic Inquiry* 22, 647-686.
- Manzini, M.R. (1988) "Constituent Structure and Locality." in A. Cardinaletti, G. Cinque,

- and G. Giusti (eds) *Constituent Structure*. Foris, Dordrecht.
- Motapanyane, V. (1989) "LA POSITION DU SUJET DANS UNE LANGUE À L'ORDRE SVO/VSO." *Rivista di Grammatica Generativa* 14, 75-103.
- Ouhalla, J. (1989) "Clitic Movement and the ECP: Evidence from Berber and Romance Languages." *Lingua* 79, 165-215.
- Ouhalla, J. (1991) *Functional Categories and Parametric Variation*. Routledge, London and New York.
- Rizzi, L. (1990) *Relativized Minimality*. MIT Press, Cambridge (Mass.).
- Rouveret, A. (1989) "Cliticisation et Temps en Portugais Européen." *Revue des Langues Romanes* 93, 212-231.
- Teyssier, P. (1984) *Manuel de Langue Portugaise Portugal-Brésil*. Klincksieck, Paris.
- Torrego, M.C. (1984) "On Inversion in Spanish and Some of Its Effects." *Linguistic Inquiry* 15, 103-129.
- Uriagereka, J. (1988) *On Government*. PhD Dissertation, The University of Connecticut.